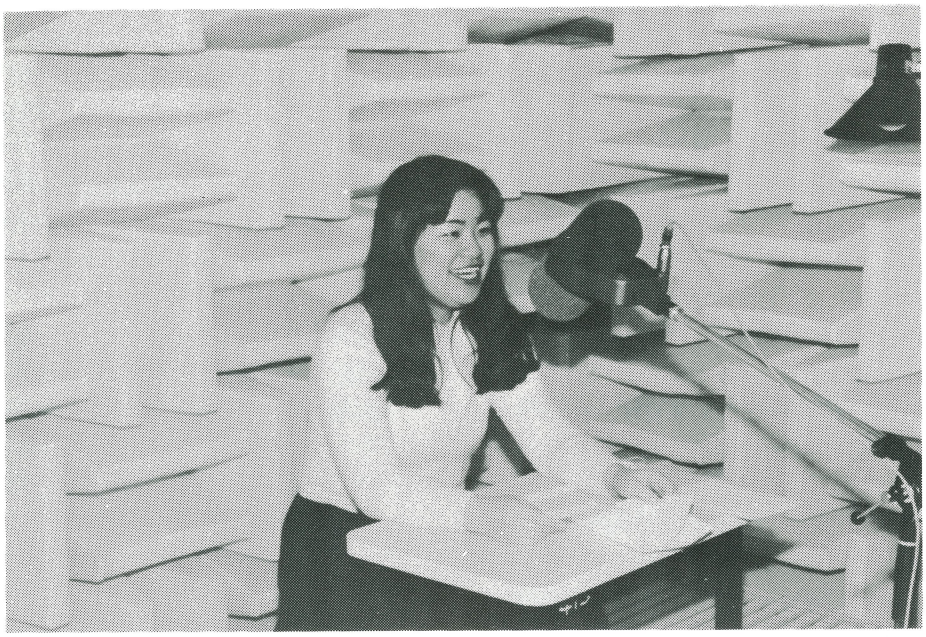
0-4-91

AV JOURNAL

1982年9月　創刊号



〈無響室での録音〉

目　次

「ＡＶジャーナル」の創刊にあたって……附属図書館長　相浦　昊
来し方いく末……学長　林　栄一
センター案の系譜……視聴覚教育委員会委員長　乙政　潤
テープライブラリーに期待する……山末　一夫
テープライブラリー、ＬＬ自習室利用者統計表……
視聴覚教材解題―フランス語― ……大木　充
イタリアの音声研究センター ……郡　史郎
５階新ＬＬ教室について……
視聴覚教育施設概要、平面図 ……
〈出版物案内〉 ……
編集後記……

大阪外国語大学

「AVジャーナル」の創刊にあたって

附属図書館長　相　浦　　杲

ここに「ＡＶジャーナル」創刊号が誕生した。

登載原稿は１年半も前から準備されていたと聞くが、ご関係の方々のご苦心も創刊に至るまでいろいろおありになったことだろうと思う。ここまで来たのは、やはり発展への情熱と研究の客観的情勢に支えられてのことであるにちがいない。

視聴覚教育の本学における重要性は言うまでもないことだが、それにたずさわる方々が、自らの意見を発表したり、知識や方法論や技術の交換を卒直に行ったりする場が今まで保証されていなかった。学問や技術の発展には、相互の切瑳琢磨は欠かせないが、このニュースの発刊によって、互いに新しい情報を入手し、前進することができるようになった。

大量の情報に取り巻かれている現在、さまざまな知識の断片を無秩序に頭の中に貯めこんでも、くずの山でしかない。

しかし、まったく十分とは言えないまでも、箕面移転後、かなり先端的な機器を整備するにいたった本学図書館の視聴覚教育工学を建設し、体系化する仕事が進みだしている。「ＡＶジャーナル」の誕生が、真に思想をもった言語教育工学の建設をさらに一歩前進させることができれば、これにまさる喜びはない。

本学附属図書館は本来の意味での図書館設備のほかに、その４、５階に綜合視聴覚教育施設を併せもっており、そのことが他の図書館にはない一つの特色をなしている。大学移転後今日まで３年を経過して、図書館利用者が大巾に増加したばかりでなく、視聴覚施設の利用者も、授業においても、自習用にも、急増してきている。従って現状についていえば、ソフトウエアとしての視聴覚資料、特にビデオ関係の開発がさしあたって必要になってきている。

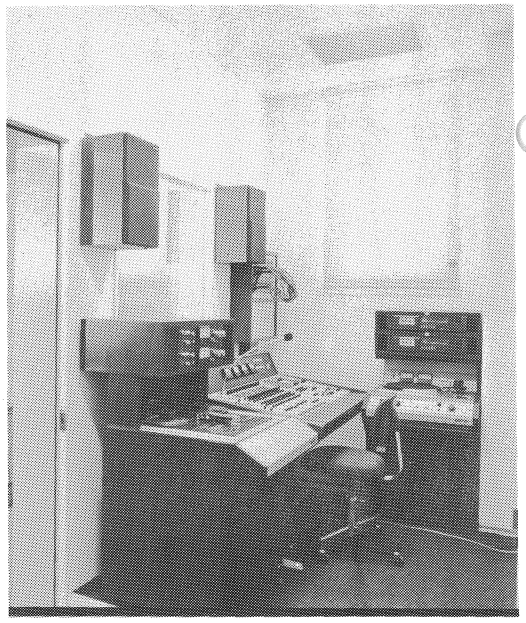
施設の状況としては、56年度にはスタジオの照明装置が完成したので、57年度にはスタジオ関連機器の充実を予定している。音声実験室もしだいに充実してきており、ビジピッチ、ソナグラフなどの機器が備えられてきた。ソフトウエアとしては、教育改善プロジェクト等によって、独自のテキスト、目録、それに貴重な論文集等もかなりの数にわたって作成されてきた。従って今後は、特殊語学（特に語学科）にない語学）の視聴覚資料の作成を何点か行いたいと考えている。現に、例えばトルコ語教本が作成されている。

以上のような綜合視聴覚教育施設の現状を将来構想との関連からみれば、すでに考えられている言語教育研修センター案の一つの基礎とも萌芽ともなっていることがわかる。

そういう現実をふまえて、「ＡＶジャーナル」が誕生したことは外大視聴覚教育研究と図書館視聴覚関係者に対して情報交換のみのり多い場となるだろう。

「ＡＶジャーナル」の創刊を祝し、その発展を祈って擱筆することとしたい。

1982．8



〈録　音　室〉

来し方行く末

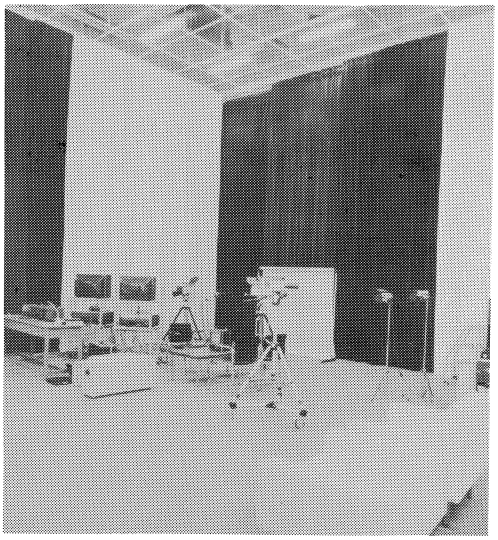
学長　林　　栄一

言語は勝義的に音声を表現手段とする。このことは、言語理論としては、かなり複雑な内容をもつが、生きた言語である限り、否定できぬ事実であろう。それにもかかわらず、わが国の外国語教育において、この現実を一般が真剣に取りあげるようになったのは、主として戦後になってからのことである。それは音韻論を出発点とした、特にアメリカの構造言語学の応用に触発された面が大きい。加うるに視聴覚機器の開発が急テンポに進展したという事情もあった。本学では、これらの事情を勘案し、生きた言語を学生に習得させることを大きな目標とする立場から、ＬＬの設置に踏み切り、昭和37年、国費を以てする大学の演練装置の第１号をもつことになった。この種の装置の普及促進とその運用の研究開発をめざした全国組織ＬＬＡが結成されたのも、この頃で、本学もその有力なメンバーとして設立に預ったのである。思えば、それは新しい言語教育の黎明であった。鬱勃とした意欲がたぎり、万事手さぐりの前進であったけれども、創造の胎動があった。

それから2 年という年月が流れた。その間にハードウェアの発達は著しいものがあり、機器の普及は高校中学のレベルにまで、全国的な規模にわたるようになった。当初の昂奮は沈静し、その得失も冷静に論じられるようになり、反省の基づくソフトウエアの開発が深く静かに行なわれることになった。多くの他の事象と同じく、ＬＬなどもステイタス・シンボルでなくなったが、それだけ定着したといえる。これは慶賀すべきことである。しかし、日常茶飯化しただけに、感激性はなくなり、熱っぽい努力もなくなってきたうらみはなくもない。

本学では関係者のたゆまざる努力に支えられて着実な進歩がみられたが、新らしいキャンパスへの移転に伴ない、施設の面では視聴覚機器は飛躍的に充実され、国立大学としては他に誇り得るものをもつことになった。内外の見学者が陸続として訪れるため悲鳴をあげている現状である。しかし手放しで喜んでおられない管理上の問題は少くない。一番大きいのは人員の絶対的な不足である。これは直ちには解消しがたいので、別な打開策を講じなくてはならない。そのためには新らしい外大の構想の中で視聴覚教育の位置づけを見直す必要がある。一時喧伝されたような万能観は、もとより支持されないけれども、理に叶った有効的使用は推進されるべきであるし、また単に本学学生のみでなく、本学で研究開発された資料を駆使しての成果は、開かれた大学として一般社会に均霑させなければならない。そのやり方は慎重に考える必要があるが、ある程度独立した機構体を、この際将来計画として審議されてよいのではないかと思う。

最近には同時通訳演習講座も開講され、また一つの応用面の進展があった。こうした発芽を大切にして、今後試行錯誤を繰返しつつ、健全な発展を成就するよう努めなくてはならない。今やＡＶ部門は第３期の新しい飛躍時代に入ったと申してよい。施設を生かすも殺すも、要はそれを使用する人の熱意にかかっている。全学をあげての支援と参加を希求してやまない次第である。



〈スタジオ〉

「センター案」の系譜

視聴覚教育委員会委員長　乙政　潤

本学にL.L.（40ブース）が設けられたのは**昭和37年**（1962年）であるが、この設備は開設以来フルに利用され、かつまた利用価値が認められて、翌**昭和38年**（1963年）には更に30ブースが追加された。

上八に学舎がある限りはこれ以上の拡充は望めず、やっと自習室を**昭和47年**（1966年）に設けたくらいで、後期上級学年にもL.L.授業をという学生の望望には応えるべくもなかった。

ところが、本学の移転が話題になるや、この潜在していた学内の要求はたちまち具体的な形をとって現れた。**昭和43年**（1968年）5月には、移転に伴う新学舎のマスタープランを作る「設備整備等に関する対策委員会」の第1小委員会はその「施設量試案について」の中で留意点の一つとして「L.L.教室の拡充」を挙げ「本学の特質からして特に緊急のこと」と述べている（『学舎移転ニュース』No.1）。

昭和47年（1972年）には「将来計画委員会」が発足したが、その一部会であった「施設計画委員会」は同年5月、L.L.関係の面積は「現在の6倍」とすることの外に、L.L.を図書館から「独立」せしめ、「演習室として研究室につける」ことを検討した（『新しい外大のために』第1号、P3）。

これは発想上の質的転換であって、以後わが大学ではL.L.を核として視聴覚施設を基盤とする外国語教育の中心となる機関を作ろうという考えが根を下して行くことになる。当面の間その内容がさらに具体的に練られることはなかったが、これが学内にコンセンサスの得られた方向であったことは、**昭和50年**（1975年）6月に教授会が移転後の新図書館に設けられるL.L.を中心とする視聴覚施設を「新しい外大の目玉」にしようと決議したことを見ても明らかである。

移転の計画と実施が進むにつれて上記の発想は具体的な姿をとり始めた。

「L.L.を核として視聴核施設を基盤とする外国語教育の中心となる機関」という発想を承ける形で現れた「センター案」がそれである。この系統の「センター案」は、現在までに三度作られ提示された。即ち、

A．**昭和54年**2月の「大阪外国語大学附属外国語教育研究所」案（「新しい外大のために」第10号に収録）

B．**昭和55年**6月に「視聴覚教育委員会」が決定した「大阪外国語大学総合語学センター規程」案（「新しい外大のために」第12号に収録）

C．**昭和55年**10月の「大阪外国語大学視聴覚教育センター規程」案（同上号に収録）

の3案である。これらはいずれも教授会で審議されるに至っていないけれども、一つの系譜をなしていることは明らかである。

一方、留学生別科からも昭和54年3月に同別科の改組案とも言うべき「大阪外国語大学附属言語文化教育センター」の構想が提示されたが、これは当時のマスタープラン部会レベルでの話し合いの対象となるに止った。印刷された資料としては残っていない。

もう一方、視聴覚教育とは別の視点からも新たに「センター案」が加わった。それは小野原の土地利用に関する将来構想に由来する。

D．**昭和55年**度将来計画委員会学術国際専門委員会の立案した「語学研究教育センター」構想（委員長山口慶四郎氏．資料は次年度将来計画委員会に引継がれ、内容的に下記の案に取入れられた）

E．**昭和56年**度将来計画委員会学術国際専門委員会の発表した「外国語総合研修センター」案（委員長相浦杲氏。『これからの外大』第13号p.5－7）

後者はA，B，C系列の「センター案」とDの「センター案」とを「統合」した案で、**昭和56年**6月25日の教授会に報告され、その「基本方針は了承」され、「今後さらに検討を加えられることとなった（教授会議事録）。

外大における「センター案」は、上八学舎時代の

萌芽的な段階から移転による名実ともに備わるとも言うべき段階を経て、ここに小野原の跡地利用を契機として更に壮大な「センター案」段階へ臨もうとしている。それは、かつての上本町時代の貧困さを知る者にとっては目のくらむような壮大さではある。けれども一方では、現実に持てる設備をいかに有効に利用して「センター」らしい実を得るか、「センター」の内容についての学内の理解をどのようにして深め、統一的な見解にまで導くかは、依然として大きな課課として我々の前に横たわっている。

× × × ×

各センター案の成立過程を骨子として、関連委員会の活動や視聴覚外国語授業に関連する出来事などを並べて作ったのが下の略年表である。(1982.8.17)

年 月 日	関連機関	事　　項
昭和50. 6. 5 (1975)	教授会	「図書館の中のL.L.を新しい外大の『目玉商品』的な存在にするためとくに面積を割く」旨決定
昭和52. 1. (1977)	施設計画部会	図書館平面図展示
1.27	教授会	図書館の面積を承認。L.L.は2,142m²
2.24	教授会	図書館の平面図承認決定
3.	ＬＬ委員会	昭和53年度概算要求として「応用言語学講座」を提出
4.28	将来計画委員会	「応用言語学科に付随したL.L.のあり方を今後検討課題とする」ことを確認
6.30	〃	図書館長（芝池氏）「L.L.の内部設備について、これを充足するための『語学研修センター整備委（仮称)』の設置」を要請
昭和53. 3.17 (1978)	拡大L.L.委員会	新しい図書館の４、５階の各室に備えるべき設備の基本方針を承認
4.20	教授会	将来計画委員会ＭＰ部会に「視聴覚教育専門委員会」設置を決定
5.18	視聴覚教育専門委員会	発足。第１回会合。昭和54年度概算要求に継続して「応用言語学講座」の要求を提出
9. 〜 昭和54. 2. (1979)	視聴覚教育専門委員会	「センター案」作成と取組み、ＭＰ部会の意向を容れて委員会案「大阪外国語大学附属外国語教育研究所」案を作り上げる(「新しい外大のために」第10号に収録)
3.23	〃	新録音室設計・施工の決定
3月		この頃より留別専門委を通して留別より「大阪外国語大学附属総合言語文化教育研究センター」案出ず
3.10 〜 15	視聴覚教育留別両専門委合同会議	ＭＰ部会長の肝煎りで視聴覚教育・留別両専門委各代表の話し合い。まとまった結論は出ず
5. 〜 6.	視聴覚教育専門委員会	新L.L.の設備内容を決定。昭和55年度概算要求に向けて、「応用言語学講座」「実験音声学講座」の要求を提出
6.28	将来計画委員会	ＭＰ部会が「センター案」を論議することを承認（ＭＰ部会長山口氏の発議に基く）

年月日	関連機関	事項
	図書館視聴覚資料係	第1次「大学教育方法等改善経費」による研究成果を編集、大阪外国語大学名で刊行。
7.5	視聴覚教育・留別両専門委合同会議	MP部会長司会の下に合議したが結論は出ず
8.		全学移転に伴いLLも移転。新図書館4階に新L.L.設置。
10〜昭和55.1.(1980)	視聴覚教育専門委員会	新図書館4、5階の設備拡充案を決定。新施設管理・利用規定を検討
2.	視聴覚教育専門委員会	デシジョンルーム開設と関連し、「同時通訳論」(講義)の開講を教務委員会へ申入れ
3.21	教授会	将来計画委員会各種専門委員会を整理することを決定。これにより視聴覚教育専門委は3月末で消滅
5.1	視聴覚教育委員会	各語学科の代表者より成る新委員会発足、「センター案」を練ることとなる
	視聴覚教育委員会	第2次「大学教育方法等改善経費」による研究成果を編集し刊行
5.29	視聴覚教育委員会	昭和56年度概算要求に向けて委員会より「応用言語学講座」、「実験音声学講座」の要求を提出(「受け皿」には下記「センター」をあてる)
6.19	視聴覚教育委員会	「大阪外国語大学総合語学センター規程」案を決定(「新しい外大のために」12号p.19−20)
6.26	教授会	将来計画委員会学術国際専門委員会(委員長山口氏)の報告に基き小野原地区に「語学研究教育センター」を置くことを決定 なお同専門委員会の案は「大阪外国語大学附属語学研修センター」案(林栄一委員案)ならびに「大阪外国語大学附属外国語研修センター」案(山口委員長案)と称している
10.30	視聴覚教育委員会	6.19に決定した案を現実に即した内容に練り直した「大阪外国語大学視聴覚教育センター規程」案を決定(「新しい外大のために」12号、p.20)
昭和56.1.22(1981)	視聴覚教育委員会	新L.L.教室(5階のの設計方針を承認。無響室工事案、ビジ・ピッチ(音声実験室用)講入を承認
4月	視聴覚教育委員会	昭和57年度概算要求に向けて、「応用言語学講座」、「実験音声学講座」の要求を昨年と同様に提出。但し、「受け皿」の名称は「大阪外国語大学外国語教育開発センター」とする
6.25	教授会	将来計画委員会学術国際専門委員会(委員長相浦氏)より、小野原土地利用にあてた「外国語総合研修センター」の設置構想が報告され基本構想は承認された

年 月 日	関連機関	事　　項
8.	視聴覚教育委員会	第３次「大学教育方法等改善経費」による研究成果を編集し刊行
10.	教務委員会	第１部英語学科の上級実習に「同時通訳」が開講されることを承認

年 月 日	関連機関	事　　項
12.	視聴覚教育委員会	昭和58年度概算要求に向けて「言語教育センター」に対処すべく、「応用言語学講座」ならびに「実験音声学講座」の要求を提出

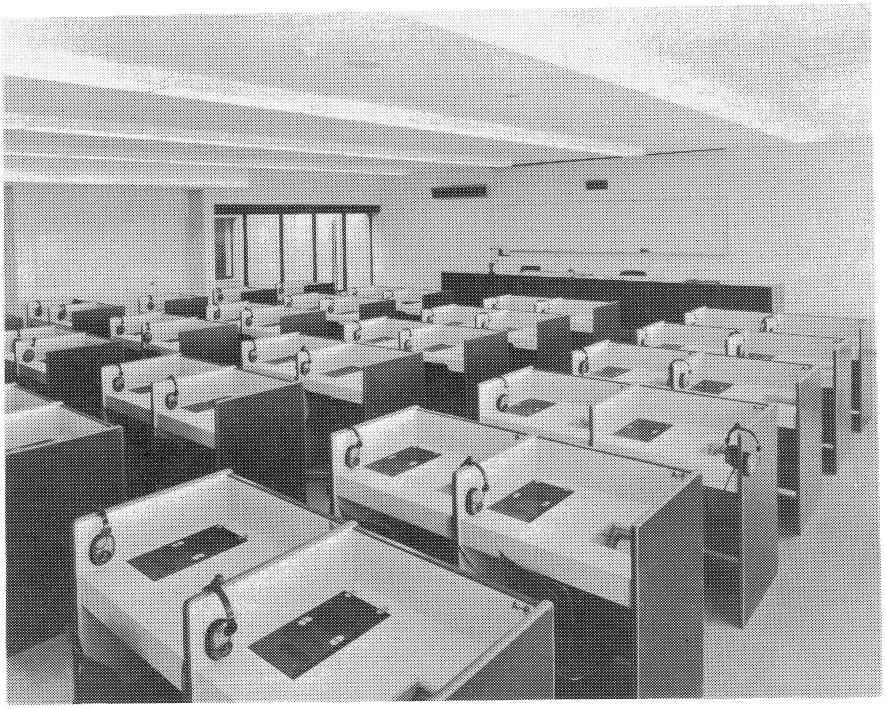
テープ・ライブラリーに期待する

言語学　山　末　一　夫

「百聞は一見にしかず」という諺も、音楽の演奏や言語の音声のような音を素材にする分野に関しては「百見は一聞にしかず」と改めなければならないであろう。数年前に、10世紀のリトワニアの詩人ドナリティウスの詩のリトワニア人による朗読をテープで聴く機会があった。それまで、印欧語文献として重要な位置を占めるリトワニア語を少しばかりかじってはみたが、実際の音声は聞いたことがなく、専ら文法書・辞書・テキストという印刷されたものを目を通して理解していたにすぎなかった耳に、そのときはじめてリトワニア語が本来の姿をとって美しいリズムと共に入ってきた。脳裡に残っていた文字が一定の規律のものに躍動し、生命をとりもどすさまがよくわかった。文字から想像していた音声とテープから聞える声はやはり微妙に違っていた。いくら音声学的な訓練を積んだとしても、聞いたこともない言語を書かれたものだけから、音声として正しく再生産することは不可能に近い。それを可能にするには発音記号を際限なく精密化していかなければならないが、そうなればその複雑さによって自縄自縛の憂き目にあうことは必定だ。音声は発音記号や文字とはちがって、はるかに多い情報量をもっている。それは個人の音声の差まで明らかにする。電話のように周波数帯域とダイナミック・レンジを制限したものでも、相手が親しい人なら誰の声かをわからせてくれる。したがって、個人差のレベルを離れても、記号や文字では十分に表記しきれない微妙な長短・強弱、高低・イントネーション・間の置き方などをも瞬時に聞き手に知らせてしまう。言語をまなぶのに個人の音声の差までまねぶ必要はないが、これらの言語固有の微細な情報はできるだけ落さないようまねぶのが望ましい。しかし一方で、音声が信号の単位として機能するときに、体系の中で単位Ａと単位Ｂを区別するのに必要な音声の差と不必要な音声の差があることを知っておくことも肝要である。外国語を話すときに不自然な訛りになりやすいのは、音声面では、言語ごとに異なることの両者の区別に混乱を生じることと、一方では前述の微細な情報を脱落させてしまうことに大きな原因がある。初級の間は何が必要で何が不必要な要素なのか判断がつきかねるから、できるだけ忠実にまねぶのがよい。手近かに先生やインフォーマントが得られないときは、まさにテープ類の独壇場だ。自分でテープをまねて声を出すことは、観客のいない芝居をやる役者のようで変な気がするものだが、予想以上の効果をもたらす。10桁の電話番号は見ているだけではなかなか覚えられないけれども、数字を二、三度称えてみれば覚えられたという経験は誰もがもってい

る。音声の連続は記憶に残りやすいようにわれわれは幼時から訓練されてきているのだ。ある言語の音声の連続を繰返し発音すれば、ソロバンやピアノの練習と同様に、当該器官に指令を出す脳細胞そのものが変化するので、その言語の音声配列規則を自然に頭の中へとり入れていることになる。また教材は基本文型に基づくものが多いから、練習すれば基本文型がいつでも利用できる形で記憶に残る。言語習得行為の大部分はこのパターン・プラクティスなのだと言っても過言ではない。最近の言語学の理論は、どんなに複雑な文章も基本文型の組合せにすぎないことを証明しようとしている。

これからも図書館のＬＬは語学テープの収集に尽力するはずである。これまでに集めたテープ類は将来の計画全体の数十分の一にすぎないが、それでも外大で勉強できる言語以外の語学テープもかなりある。アイルランド語、クルド語、タガログ語、ハンガリー語等々、たとえ本気で勉強するところまでいかなくても耳を傾けたいテープは沢山ある。テープがあれば外国人インフォーマントと逢う時間や場所や費用の心配も無用となる。本と同じ気軽さだ。しかし、市販されている特殊な語学テープの中にはカセット一巻とテキストだけで私の月給より高いものもある。いくら録音しにいくのに費用がかかるといっても月世界まで行くわけじゃないし、業者のペースに乗せられないためにも、せいぜい図書館のテープ類を利用させてもらうつもりでいる。



〈4階ＬＬ教室〉

テープライブラリー、LL自習室利用者統計表

○1980年1月～1982年7月まで
○この統計は録音テープ、ビデオテープの借用者数だけで、施設、設備の利用者は入っていません。
○学科別の利用者統計については今回削除しました。

テープライブラリー　&　L.L.自習室利用者(1)

I部（II部）

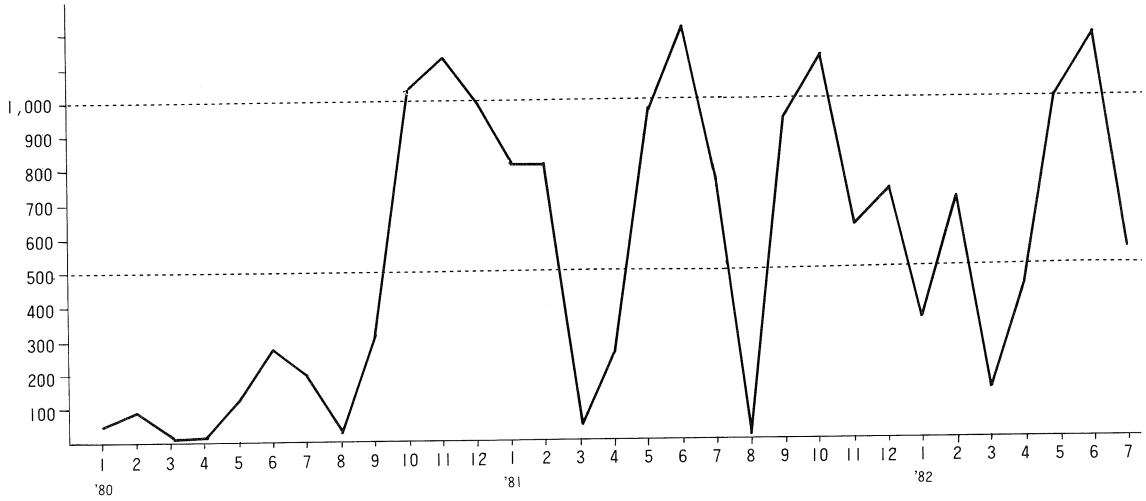
	1　年	2　年	3　年	4　年	留学生（5　年）	その他	合　計
1980年1月	10 (0)	8 (1)	2 (0)	2 (0)	0 (0)	20 (1)	42 (2)
2月	16 (5)	9 (1)	3 (0)	11 (0)	0 (2)	39 (8)	78 (16)
3月	0 (0)	2 (2)	1 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (2)	4 (4)
4月	1 (0)	2 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (0)	6 (0)
5月	16 (0)	18 (5)	7 (2)	9 (0)	0 (2)	50 (9)	100 (18)
6月	16 (2)	59 (7)	25 (5)	16 (0)	0 (0)	124 (14)	240 (28)
7月	18 (5)	45 (15)	7 (1)	10 (0)	0 (0)	81 (21)	161 (42)
8月	2 (0)	2 (0)	3 (0)	7 (0)	0 (0)	13 (0)	27 (0)
9月	25 (1)	80 (3)	37 (0)	19 (0)	0 (0)	164 (4)	325 (8)
10月	202 (3)	152 (11)	77 (9)	54 (0)	2 (4)	485 (27)	972 (54)
11月	398 (2)	90 (7)	30 (2)	31 (0)	30 (0)	511 (11)	1,090 (22)
12月	317 (0)	93 (7)	37 (2)	28 (0)	25 (0)	473 (9)	973 (18)
計	1,021 (18)	560 (59)	229 (21)	187 (0)	57 (8)	1,964(106)	4,018(212)
1981年1月	324 (2)	32 (15)	18 (1)	37 (0)	6 (0)	370 (19)	787 (37)
2月	303 (10)	53 (14)	11 (2)	11 (0)	3 (1)	384 (27)	765 (54)
3月	11 (0)	4 (5)	1 (5)	11 (0)	11 (0)	1 (0)	39 (10)
4月	38 (1)	100 (1)	51 (5)	20 (2)	29 (1)	9 (1)	247 (11)
5月	512 (5)	155 (0)	86 (6)	48 (3)	111 (2)	38 (0)	950 (16)
6月	687 (7)	151 (3)	118 (12)	66 (5)	90 (0)	66 (1)	1,178 (28)
7月	299 (13)	125 (10)	105 (12)	39 (8)	109 (1)	40 (0)	717 (44)
8月	2 (2)	4 (0)	2 (0)	1 (0)	0 (0)	3 (0)	12 (2)
9月	530 (11)	145 (0)	112 (31)	22 (2)	49 (0)	30 (2)	888 (46)
10月	607 (4)	168 (5)	150 (17)	18 (4)	45 (3)	95 (2)	1,083 (35)
11月	325 (5)	104 (4)	72 (8)	9 (0)	66 (0)	39 (0)	615 (17)
12月	421 (9)	106 (4)	101 (7)	11 (1)	60 (0)	4 (0)	703 (21)
計	4,059 (69)	1,147 (61)	827(106)	293 (25)	579 (8)	1,079 (52)	7,984(321)

テープライブラリー　&　L.L.自習室利用者(2)

I部（II部）

	1　年	2　年	3　年	4　年	留学生（5　年）	その他	合　計
1982年1月	194 (2)	55 (1)	51 (0)	18 (1)	32 (0)	7 (0)	357 (4)
2月	342 (17)	99 (9)	79 (4)	72 (3)	65 (0)	12 (0)	669 (33)
3月	19 (5)	29 (3)	8 (0)	27 (0)	38 (0)	21 (0)	142 (8)
4月	131 (0)	91 (10)	64 (6)	48 (1)	57 (7)	31 (0)	422 (24)
5月	297 (3)	246 (4)	153 (4)	101 (8)	53 (0)	34 (0)	884 (19)
6月	465 (9)	256 (4)	156 (1)	71 (0)	65 (1)	60 (1)	1,073 (16)
7月	180 (2)	136 (3)	62 (2)	44 (0)	78 (5)	31 (0)	531 (12)

3カ年利用者推移グラフ



視聴覚教材解題—フランス語—

フランス語学科　大　木　　充

• 自習用に最適な教材

外国語教育が「伝達能力」を養うことをも目的としているなら、すなわち、自分の言いたいことを相手に適切に伝え、また相手の言わんとすることを正確に理解できる能力の養成を目的としているなら、大学の一般教養科目（本学では「外国語科目」）の外国語の授業において、この目的を達成することは、まず不可能である。それにはさまざまな原因があるが、第一に、授業時間数の問題である。教養の外国語に割当てられている時間は普通90分授業が週２回である。次に、クラスサイズの問題である。クラスの人数が50人を超える場合もまれではない。このような物理的条件のもとで、教師が教授法や教材をいかに工夫しようとも、「伝達能力」を養う授業はまず不可能である。現行の大学の授業でも、文法事項や表現に対する「理解」は十分に得られるはずである。しかし、それに「習熟」し、さらに「運用」できるようになるためには数多くの「練習」が必要である。この練習が授業では十分におこなえないのである。

そこで何らかの方法で現行の大学の授業で不足している部分を自主的に補足しなければならない。幸にして、本学の視聴覚教室には、自習のための、ソフト（教材）もハード（機器）もそろっているので、それらを利用することができる。

フランス語の自習教材として今回紹介するのは、Basic Spoken French（「フランス語基礎会語」）である。視聴覚教室には、そのほかいろいろ教材があるが、フランス語を実際に使う能力が養えて、しかも自習できる教材となると、このBasic Spoken Frenchが一番適している。テキストにしても、テープにしても自習しやすいように編集されいるからだ。この教材は、アメリカで外交官研修用に作られたテキストの日本版であるが、日本人学習者向きに手が加えられている。この点からも自習に適していると言える。

• 全体と各unitの構成

「入門コース」と「初級コース」にわかれている。入門コースはテキスト１冊(428ページ）とカセットテープ20巻（録音時間16時間30分）からなり、初級コースは、テキスト１冊(535ページ）とカセットテープ23巻（録音時間18時間38分）からなっている。入門コースは、初心者向けの導入部である「予備学習」と12のunitから、初級コースは11のunitからできている。それぞれのunitは、「小さなホテルで」、「買物に行きましょう」、「自動車事故」というような日常生活で起こりえる状況がテーマとなっている。「入門コース」と「初級コース」の区別には殆んど意味がない。フランス語のさまざまな文法構造や、日常生活に必要な表現に習熟し、運用できるようになるためには、２つのコースを終えなければならないからである。各unitは「Dialogue」で始まる。ここでまず、基本的な表現、単語、文法を理解する。続く、「関連事項」、「単語の勉強」、「文法ドリル」ではdialogueの部で学習したことに習熟するとともに、さらにそれらを補充、発展させる。この部分を何度も繰り返し練習し、確実にものにすることが、実際に使えるフランス語を身につけるためのコツである。unitの残りの部分は、dialogueのテーマに関連している「資料」、「応用小会話」、「問のドリル」、「反応のドリル」、「物語」で、これまでに理解し、習熟している文法事項や表現を実際に運用する練習をする。

「基礎フランス語会話」という題名の教材であるが、その内容から言っても、また分量から言っても、かなりの努力を要する教材である。しかし、それだけに成果の期待できる教材である。このコースを無事終えた人は、この教材と同じくアメリカ外交官研修所が製作したIntensive Spoken Frenchのコースにすすむことにより、さらに力をつけることができる。

• 3年生までに一度はフランス語づけに

フランス語専攻の生徒は、授業で現在やっているLa France en directと同じようなテーマが扱われているunitを選び、授業と平行してやれば、能率的かつ効果的である。外国語をものにするには、毎日、少しずつコツコツやることも必要であるが、それと同時に、ある時期に、一定期間、集中的にやることも必要である。3年生までに一度は、夏休み、春休みを利用して、この教材に、集中的に取り組み、フランス語づけになることをすすめる。

イタリアの音声研究センター

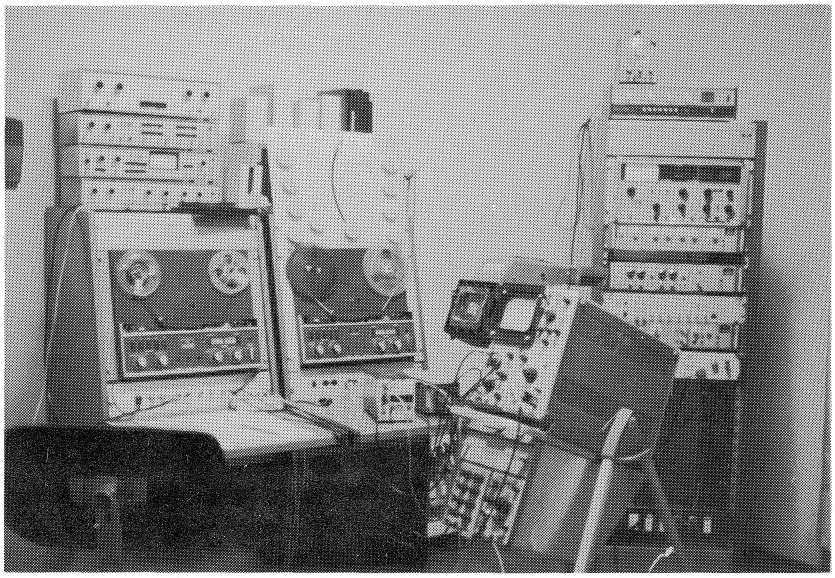
イタリア語学科　郡　　史郎

ベネツィアから西へ40km、パドバは13C初頭設立の有名な大学を持つ学園都市であるばかりでなく、カトリックのもっとも重要な聖人のひとりである聖アントニオの町として宗教都市の一面を持ち、またこのあたり一帯の政治経済の中心としてもすでにローマ時代から活気溢れる町だった。このパドバの町に音声学専門の研究所が設立されたのは偶然ではない。ヨーロッパ最初の解剖学教室を持ち全欧から学生を集めたほどの医学の伝統を受けつぐ著名な音声医学者クロアットと、これもやはり有名な言語学者としてこの町で活躍したタッリャビーニが本格的な音声の研究の必要性を感じて音声学研究のための研究センター（Centro di studio per le ricerche di fonetica del C.N.R.）の設立に成功したのは1971年のことである。クロアットは現在このセンターの所長であるが、タッリャビーニがその後重度の失語症になってしまったのはまさに皮肉とでもいう他はない。このセンターはイタリア学術会議の機関であるが、同時にパドバ大学文哲学部の言語および音声学研究所にも属している。この他、大学には付属の言語治療士養成学校もあり、文哲学部のみならず教育学部で研究職に就く者の中には少なからず音声学に興味を持つ者がいるから、パドバはイタリアにおける音声学研究の中核を成している観がある。現在、センターの職員は9人と規模は小さいが音声学を広く対象としている研究所としてはイタリアで唯一のものである。筆者はここに78年秋から2年間イタリア政府の奨学金を受けて滞在した。

所長が医者であることは既に述べたとおりであるが、研究員6人のうち2人は物理出身、3人が言語出身、あとひとりが心理出身という構成員の幅の広さからうかがえるように、本センターの特色は対象とする研究分野の広さであり、それは普通に考えられている音声学の枠を越え、言語治療から犯罪解決のための話者同定にまで及び、またそれらの分野で相当の効果をあげていることである。これらの成果はActa Phoniatrica Latina, イタリア音響学会誌をはじめ各種の雑誌に発表されているが、センター自らの定期刊行物を持つに至っていない。ただ、これだけの幅の広さを持つ構成員が一致協力してひとつのプロジェクトにあたればより一層の効果が得られるであろうに、そこはイタリアのこと、なかなか全員の共同研究は実現しない。しかし現在の音声研究の対象とすべき範囲のあまりの広大さと、我々がこれまでに知り得た知識の乏しさを考えるならば、全員がひとつのテーマに従事するよりも、それぞれが自分の分野を追求した方が今のところ効果的だという考えもできよう。それでもたいていの場合は2、3人の共同研究という形をとっており、それで結構うまく機能していたように思う。

研究員の現在までのおよその仕事内容を紹介すると、まず所長は耳鼻咽喉科医として自らの別の研究

所を持っており、普段はそちらにいるが、歌手のレナータ・スコットの手術を手がけるなどこの方面ではイタリアの権威的存在である。しかし同時に人生を享楽するタイプであり、趣味も広く、学会の後の懇親会ではアコーディオンをひいて歌を歌い、自作の最新の小話で皆を沸かせることで有名という人だった。物理出身のひとりは、音響分析、合成、話者識別などを手がけたが、最近では関心を生理面に移し、所長と共同で声帯の研究、歌唱時の発声法についてユニークな研究を行なっている。もうひとりの物理出身の研究員は主にコンピュータを扱っているが、最近心理学出身の研究員と共同で知覚面の研究に携っている。言語出身のうちひとりは数学者と共同で仕事をしているいわゆる数理言語学者であるが大型計算機を使ってのイタリア語頻度辞典、音素出現頻度、分布の統計等の他、最近ではＭＤＳ（多次元尺度構成法）に手を染め、これを言語の研究に応用した仕事をしている。もうひとりの言語出身の研究員は理論家でもありその活動範囲は非常に広い。なかでもプロソディに関する仕事が比較的多いように思われるが、概説的な著作もいくつかある。言語出身の３人目はパートタイマーでふだんは英語を教えている。鼻音、プロソディに関する仕事の他、ソマリア語の音声記述という異色の仕事もしている。一般に思われているイタリア人のイメージとはかけはなれた仕事に没頭するタイプで、筆者と共同で研究していた時などよく朝の８時から夜の２時３時までぶっ続けで働いたものだった。音声学に興味があろうとなかろうと訪ねてきた人は自分の考えを滔々と披露して驚かせていた。心理出身の研究員は音声の知覚面、とりわけいわゆるカテゴリカル知覚についての仕事をしている。6人のうち実に5人までが女性で、ひとりを除いてそれぞれ家族を持っていたが、ほとんどみな旧姓で通していたのは興味深かった。研究員の他に事務に携わる職員と技師がいた。２人とも大変な能力を持った人だったが、特に技師の方は大学一の技術者と自他共に許していた人だったが（パドバ大学は優秀な工学部でも有名である）、ある日突然町の一番中心の広場の文房具店が遺産の関係か何かで手に入り、いったん技師の仕事をやめてしまった。しかし後々年金が欲しいというので最近またパートタイムで元の仕事を再開した。このように職を２つ持っている人はイタリアは多い。センターには購入した既製品の装置の他に自家製の装置がいくつもあったが、ほとんどこの人の手になるものだったし、機械の故障もみんなこの人にまかせておけば

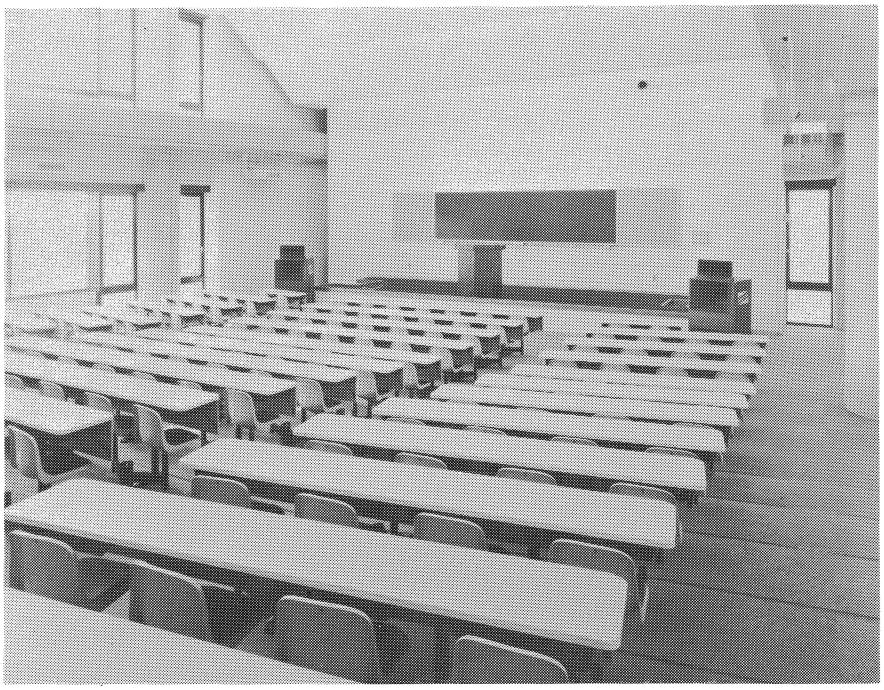


〈音声研究センター実験機器〉

よかったので安心して使っていられた。センターがうまく機能していたのはこの人のおかげによるところが大きい。

研究員の多くは大学附属の言語治療士養成学校でも教鞭をとっていた。学校を出てもそれに相応しい仕事のないイタリアは珍しく、言語治療士は仕事があるというので最近とみに人気が高いのだが、こうした学生の中には、音声学で卒業論文を書く者が多く、その指導に研究員が忙殺され自分の研究にあてる時間が僅かしかないのは同情に堪えなかった。もっとも指導といっても、文哲学部の学生と違ってただ卒業するために義務的に論文を書く学生が多く、また指導者がテーマの選択から内容、果ては文体に至るまで口を出すのが常であるから、結局誰が書いたかわからなくなることもしばしばである。指導教官である研究者はそれを利用して内容を整理充実させ、自分の研究成果として発表することも少なからずあるから、学生の指導も自分の研究のうちということかもしれない。先に全員の共同研究が実現しないことを述べたが、こうした時間のなさもひとつの原因である。しかし実はこの他にも小さからぬ原因があるように思われる。すなわち、お国を問わず一般にいわゆる理系と文系の間にはぬきさしならない相互不信があるようだが、このセンターのように学際的であるように見えるところでも両者の間にはやはりその傾向があり、互いの研究対象に真に興味を示さないことが全員による本格的な共同研究を妨げる原因になっているように筆者には思われた。しかしこのことは両者の日常の関係にも及ぶものではなく、筆者が2年間滞在し現在でも協力関係を続けていられるのはその家族的雰囲気のなさしめるところであり、筆者と同様の資格で物理の研究所にいた友人などはこのことを非常に羨ましがっていたものだ7部屋しかないセンターは朝から夕方まで人の出入りが絶えず、研究員の家族、学生、業者の他に、全欧各地からの言語学者、音声学者、心理学者、数学者等々がやってきてはおしゃべりをしていった。こうした様々な分野の人々との交流を通じて筆者も少なからぬ知的興奮と学問的刺激を享受できたことはまったくの幸せであった。

センターで筆者が感じたことのひとつは音声、言語研究における共同研究の必要性と有効性だった。こうした意味においても、またわが視聴覚施設にも言語実験設備が整いつつある状況に鑑みて、実験的手法によって言語研究を行なう方がひとりでも増えることを希望して本稿を終える。



〈視聴覚教室〉

主要機器一覧　5－Ⅰ　新ＬＬ教室について

品　　名	仕　　様	数量	品　　名	仕　　様	数量
〈マスター部〉			〈ブース部〉		
マスターコンソール	ＷＥ－8000	1	ヘッドホーン	ＷＥ－5920	44
マスターオープンデッキ	ＲＳ　1500Ｕ	1	ブーステープレコーダー	ＷＥ－6550	44
マスターカセットデッキ	ＲＳＭ 250	2	ブーステレビ	ＴＨ－8－Ｖ3Ｃ	44
カラー提示装置	ＷＥ－9000Ｎ	1	天井スピーカー	ＷＥ－4150	4
VTR U matic	ＮＶ－9300	1	〈ステレオ装置〉		
VHS	ＮＶ－8200	1	アンプ	ＳＶ－8055Ｐ	1
ＡＶコントローラ		1	レコードプレーヤー	ＳＬ－9	1
			スピーカー	ＳＢ－6	2

55年度の特別設備費で第３新L.L.教室が完成し、56年度から使用されていますが、その概要を紹介します。

ブースは44席、その他に普通授業及びレコード・コンサート用に18席を設けている。

〈設備〉

別表の通りですが、ブースは自習用もかねて完全密閉になっていて個別学習方式を採用しています。床にはじゅうたんが敷いてあるので、スリッパにはきかえて入室せねばなりません。

〈特徴〉

１．L.L.装置

○４チャンネル・ブラウン管表示方式で、同時に４種類のプログラムを送り出すことが出来、学生の学習状況をブラウン管で見ることが出来る最新のL.L.システムです。

○カラーブラウン管は、①学習モード選択、②テープレコーダー動作、③学生座席、④音声系統、がシンボルイラストと矢印で表示されています。

○より効果の高い、学習レベルに応じた個別指導が出来ること。

ａ．１種類の教材を全員に送り出すＡＬＬ

ｂ．学生の座席のタテ一列ごとに送り出すCOLUMN

ｃ．１人１人送り出すINDIVIDUAL

ｄ．学生が自由に選べるSTUDENT　SELECT

○テープ教材によるヒヤリングや発音練習ばかりでなく、ペアレッスン、グループレッスン、モデルレッスン自習機能が組み込まれています。

○アナライザーを装備されていて、個別反応による回答分布表示、時間累積表示（集団反応）も可能です。

○学生とのコミュニケーションには多様な型が考えられ、パノラミック、ピックアップ、インディビデュアルモニターが出来ます。

○コール機能も、コール・レスポンス、オールコール、チャンネル別コール、インターカムとあります。

○マイクカット機能がありますから、教材テープの雑音が入るのを防ぐことが出来ます。

○ブーステープレコーダーにはマスターからのリモコンだけでなく、クイックバックレォスン、メモ。リーリワインド機能が付いています。

２．カラー教材提示装置

図書、印刷物、写真をはじめ、話し手の表情や口の動き等さまざまな視聴覚教材を直接ビデオカメラで撮影し、各ブースのテレビに映し出す装置で、スライド、８㎜なども写し出すことが出来、また微細な部分まで映し出しますから、白板のかわりにノートに書くものまでも写し出すことが出来ます。室内を暗くする必要もありません。

３．ＶＴＲ

ＶＴＲは、Umatic、ＶＨＳと二つの規格のものを設置しました。マスターコンソルにリモコンがありますから、切り換えでどちらも使用が可能です。β規格のものはビデオルームでの使用が可能です。

４．ステレオ装置

ステレオ装置はL.L.関係機器がすべてモノラルですから、L.L.装置とは別系統で、切り換えによって使用できるようになっています。少人数のレコードコンサートもできます。

このほか、O.H.P、スライドなども備えてあり、ほとんどすべての視聴覚授業はこの教室で出来ます。

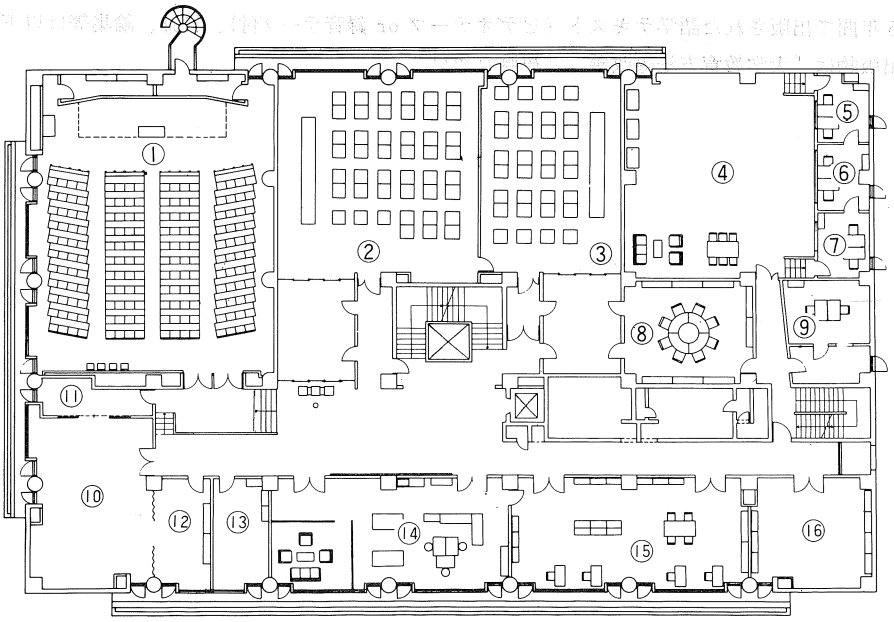
簡単に新L.L.教室の特徴を、機能を中心にあげましたが、ご意見などありましたらお聞かせ下さい。

施設の概要

階数	室名	数量	面積	設備名	使用目的
4	L.L.教室 (1)	45ブース	132.5m²	各ブースカラーテレビ付 教材提示装置、マイコンアナライザー、全リモコンマスターコンソール	各語学科L.L. 授業で使用
	L.L.教室 (2)	32ブース	100.5m²	各ブースカラーテレビ付 教材提示装置、リスポンス・アナライザー、全リモコンマスターコンソール	各語学科L.L. 授業で使用
	視聴覚教室	176席	233 m²	電動スクリーン・カーテン、リモコン、マイク、大型スピーカー、	視聴覚授業、学会、映画会、コンサート等に使用
	デシジョンルーム	21席	62.5m²	会議ユニット、送信機、受信機	小国際会議場として使用
	同時通訳室	5席	12m²	同時通訳ユニット、録音装置	同時通訳演練のため今年度から授業に使用
	テープライブラリー室	24席	77.5m²	所蔵テープ、レコード16,000点 (教材自動送出装置 4席 リスニング ブース 4席 L.L.自習ブース 12席	学生の自習用のため使用
	録音室(アナウンスルーム・制御室)		28m²	円盤再生機、高性能録音機、マイクミキサー	Native Speakerの録音のため使用
	スタジオ		121m²	ビデオ撮影機、編集機、テレシネ装置、照明装置	独自教材の開発、映像音声、収録のため使用
	企画室		11.5m²		
	調整室		12m²		
	編集室		11.5m²		
	ビデオルーム	8席 (補助7席)	39m²	ビデオコーダー、テレビ (Umatic, VHS, β型)	独自教材及びビデオ教材の映写室
	コンピューター室		39m²		
	事務室		77.5m²		
	資料整理室		19.5m²		
	モニター室		19.5m²		
5	L.L.教室 (3)	44ブース	155.5m²	各ブースカラーテレビ付 教材提示装置、マイコンアナライザー、全リモコンマスターコンソール	各語学科L.L.授業及び視聴覚授業で使用
	L.L.教室 (4)	30ブース	77.5m²	オープンテレコ、OHP	各語学科L.L.授業で使用
	L.L. 自習室		58m²	ビデオコーダー、カセットコーダー	録音ビデオ教材の貸出によって学生が自習する室
	映写モニター室		20m²	オーディオ装置、マイクミキサー	
	音声実験室		48.5m²	サウンドスペクトログラフ、ビジピッチ、オシロスコープ他	言語の性質を解明するためまざりもののない音声を収録、分析するため使用
	無響室		29m²		
	教材作成室	3室	58.5m²	テープレコーダー、カセットコーダー	教材の編集(音声)のために使用
	海外放送受信室		11m²	受信機、テープレコーダー	海外放送を受信、録音
	準備室		11m²		

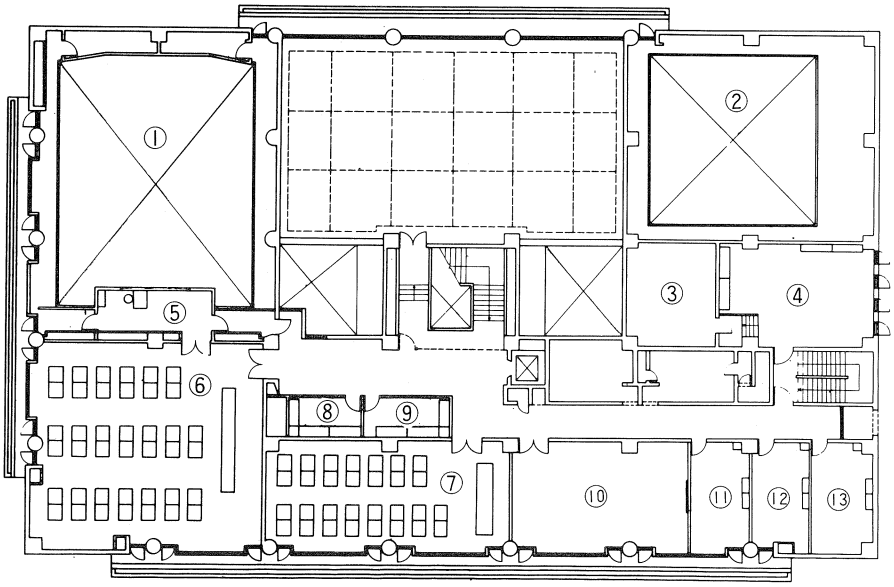
視聴覚教育施設平面図

4階



①視聴覚教室
②4-Ⅰ L.L教室
③4-Ⅱ L.L教室
④スタジオ
⑤編集室
⑥調整室
⑦企画室
⑧ビデオルーム
⑨録音室
⑩デシジョンルーム
⑪同時通訳室
⑫モニター・資料室
⑬資料整理室
⑭事務室
⑮テープライブラリー
⑯コンピューター室

5階



①視聴覚教室吹抜
②スタジオ吹抜
③無響室
④音声実験室
⑤モニター室
⑥5-Ⅰ L.L教室
⑦5-Ⅱ L.L教室
⑧海外放送受信室
⑨準備室
⑩L.L.自習室
⑪教材作成室Ⅰ
⑫教材作成室Ⅱ
⑬教材作成室Ⅲ

〈出版物案内〉

過去5年間で出版された語学テキスト（ビデオテープ or 録音テープ付）、目録、論集等は以下の通りです。これらの出版物は「大学教育方法等改善」「視聴覚教材開発」等のプロジェクトによるものです。

テキスト及び目録

- Audiovisueller Deutschunterricht für Mittelstufe　1978　乙政　潤
- Textbook of Colloquial Egyptian Aradic for Language Laboratory Vol. 1　1978　福原　信義
- Introduzione alla pronunzia italiana per il Labovatorio Linguistico　1980　藤村　昌昭
- Tài liêu tâp nghe nhìn tiêng Viêt（Trung câp）ベトナム語中級視聴覚教材　1980　冨田　健次
- Comme un Boomerang（ブーメランのように）シナリオと解説　1981　Rossigneux
- ベルシャ語の発音、ペルシャ語の書き方　1981　カーゼンプール・岡崎　正孝
- Português : Falar e Entender Gurso Lntermediário　1982　河野　彰
- Introduction aux Gestes Francais　1982　Rossigneux・大木　充
- 中級ビルマ語会話　1982　南田みどり
- トルコ語教本　1982　勝田　茂
- スライド目録(解説とテキスト)　1981
  ―ロシア編―
- スライド目録　―イラン編―　1981
- スライド目録　―パキスタン編―　1982

論集

- 『L.L.授業の効果の分析と評価』1979
  - インド・パキスタン語学科におけるL.L.授業の実際と反省　溝上　富夫
  - ビルマ語初級L.L.教育の現状　南田みどり
  - 英語教育におけるL.L.授業の効果　舟阪　晃
  - 中級ドイツ語の書き取りにおける誤りの調査　乙政　潤
  - デンマーク語教育におけるL.L.利用　クリステンセン　間瀬英夫・序
- 『諸外国における外国語教授法研究の実情』　1979
  - アメリカの言語理論に基づいた視聴覚教授法　舟阪　晃
  - 西ドイツにおける視聴覚外国語教授法　友田　舜三
  - フランス語の視聴覚教育法　松井　三郎
    ―資料紹介―
  - ソヴェート教授法学における「視聴覚教授法」の意義について　生田美智子
- 『視聴覚資料の外国語授業への有効な取入れ』　1980
  - 視聴覚外国語教授法とその実践　―西ドイツの場合―　友田　舜三
  - ソヴェートにおける視聴覚メディア利用の理論的基礎　生田美智子
  - 外国語の口頭練習における視聴覚資料の効果に関する実験的研究　―中級ドイツ語の場合―　乙政　潤
  - イスパニア語教育のための諸方法の分析　中岡　省治
  - 習得困難な外国語音の学習　―音声分析機器利用の現状と改革案―　福居　誠二
  - ビルマ語発音の習得状況について　南田みどり
  - 一般音声学テープ教材の作成　間瀬英夫・福居誠治
  - 朝鮮語発音コース作製における諸問題　北嶋　静江
  - 報告　本邦初「ベトナム語中級視聴覚教材」製作始末記　冨田　健次
- 『視聴覚メディアのシステム化と外国語授業の体系化』　1981
  - ビルマ語聴解力テストに見る誤答例の分析　南田みどり
  - 一般音声学テープ教材プログラム　福居　誠二
  - 「情報伝達構造」に習熟するためのCommunication Practiceの必要性　大木　充
  - 構造練習問題の形式的分析に関する覚え書き　中岡　省治
  - 聴覚教材の品質　福居　誠二

ペルシア語視聴覚教材の作成　岡崎　正孝
ベトナム視聴覚教育試論　冨田　健次
視聴覚教育雑感
—イスパニア語の場合—　森本　久夫
ドイツ語初級文法の「個別学習」プログラム作成の試み　乙政　潤
上智大学　同時通訳教育実施状況見学報告　向　高男・田川弘雄

編集後記

□念願のＡＶジャーナルの発行にやっとこぎつけたという感じです。原稿を早くから預っていながら今になってしまいました。
A.V.ジャーナルの発行については、外大が箕面に移転する前から考えられていたのですが、諸般の事情により、仲々実現には到りませんでした。

□移転後３年を経過して視聴覚教育施設の設備もだいぶ整備され、その利用は最近非常にふえてきています。このことは今号に過去3年分の利用者統計を掲載しましたからよくお分りになると思います。

□国際化社会といわれる現在、ますます外国語教育の重要性がさけばれていますし、とりわけ視聴覚教育はその中軸をになうもので、今後更なる発展が期待されます。特に本学の視聴覚教育施設の有効な活用がその方向性を示してくれるだろうと思います。

□A.V.ジャーナルは年間３回刊行を予定しています。大くの方々の寄稿、ご意見をおよせ下さい。

□タイトルのデザインは本学附属図書館の沢山輝彦氏によるものです。　(H. K.)

〈デシジョンルームでの同時通訳デモンストレーション〉

A V　Journal　—創刊号—

1982年 9 月16日発行

編　集　大阪外国語大学視聴覚教育委員会
附属図書館視聴覚資料係
発　行　大阪外国語大学
印　刷　㈱ムラタ印刷